

次世代に受け継ぐ自然環境 —河川汽水域の保全と再生に資する技術開発—

中村圭吾* 岩見洋一** 山本 聡***

1. はじめに

汽水域は、川と海の双方から潮位、波浪、洪水、土砂、水質汚濁などの影響を受け、複雑かつ固有の環境を有している。汽水域には、この環境に適応した特有の生物が生息し、とりわけ干潟は生物多様性や水質浄化、あるいは景観の観点から環境上重要な役割を果たしている。一方で、汽水域を有する沿岸や河口域は、漁港や港湾、埋立地などに利用されるなど、その自然景観は大きく改変されてきた。

河川汽水域の管理においても環境と治水の両面が調和した河道の管理が求められているが、汽水域は環境がとりわけ複雑であることもあり、管理を適切に行っていく上で、十分かつ体系的な学術的・技術的知見がないのが現状である。

そこで、国土技術政策総合研究所ではプロジェクト研究「汽水域の保全と再生に関する研究」(H20～H23)を立ち上げ、このような複雑な物理・化学的環境を有する河川汽水域を主な対象として、図-1に示す検討を行った。

以下に本プロジェクト研究で得られた主な成果を示す。

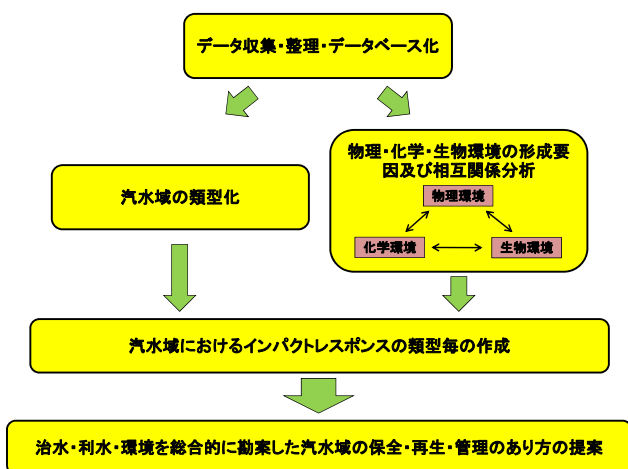


図-1 研究の全体概要

2. 研究成果

2.1 汽水域に関するデータベースの作成

全国の一級水系を対象に河川汽水域のデータベースを作成した。具体的には、物理・化学・生物環境に関する調査データを収集・整理し、座標値やファイル形式など必要な修正、変換を行い、地形を基盤とした環境情報の重ね合わせによる分析や検討を行うことができるようにGISデータベースを作成した。

2.2 河川汽水域の類型化

複雑で固有性の高い河川汽水域であるが、河川汽水域を環境特性により類型化することができれば、同じ種類の河川の中から人為的改変の程度が異なる河川を選んで、これらの環境を比較することで、特定の人為的改変の環境影響を評価することが可能になる。そこで、河川汽水域を規定すると考えられる自然環境要素を抽出し、全国一級水系において河川汽水域の類型化を実施したり。

ここでは平時の河川汽水域を規定する要因（平常時の環境形成要因）による検討例を示す。平常時の環境形成要因としては、単位幅当たり低水流量、河床勾配、潮汐差を指標に、主成分分析及びクラスター分析などの統計的手法により分析した。

平常時の環境形成要因のうち影響が大きいと考えられる成分を図化し、分類したものを図-2に示す。

平常時の環境形成要因については、クラスター分析により5つのグループに分けることができた。第1主成分の値が正の水系は、潮汐差が大きいグループであり、負の水系は単位幅当たりの低水流量が大きい水系である。第2主成分については、主に河床勾配が支配的要素であり、値が小さいほど勾配が大きい水系である。

表-1には対象河川をそれぞれ5類型に分類した結果およびその特徴、主な河川例を示す。平常時の環境形成要因に関して、潮汐の影響が非常に大きい「強潮汐型」は、干満の差が大きいことで知られる有明海や瀬戸内海の周辺河川に多く、潮汐

の影響が比較的大きい「潮汐型」は、伊勢湾等の内湾の周辺部に多く分類された。流量が大きく勾配の緩い「大流量型」は、主に日本海側の大河川が分類された他、流量の影響が比較的大きい「流量型」は太平洋側や日本海側に広く見られた。また、北陸・中部地方の3,000mクラスの山地から流れ落ちる急流河川は「勾配型」に分類され、汽水の影響が小さい河川といえる。

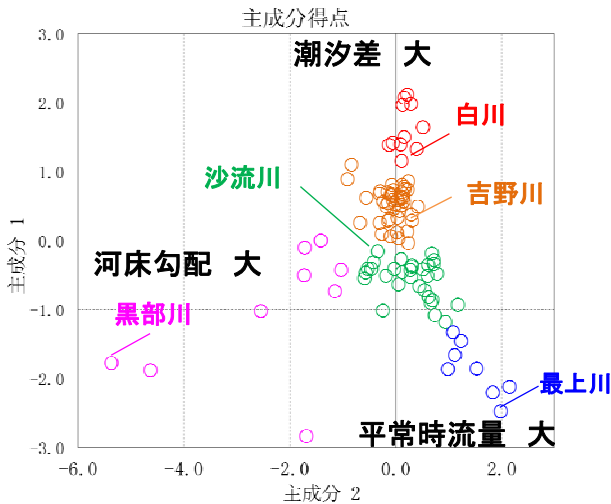


図-2 平常時の環境形成要因による類型化

表-2 平常時の環境形成要因による類型

名称	特徴	水系の分布	河川例
強潮汐型	潮汐が非常に大きい	有明、瀬戸内海の一部	太田川、菊池川
潮汐型	潮汐がやや大きい	太平洋側	木曾川、吉野川
大流量型	勾配が緩く流量が多い	主に日本海側の大河川	米代川、最上川
流量型	河川流量がやや多い	日本海側、太平洋側	北上川、利根川
勾配型	勾配が大きい	北陸～中国、東海	黒部川、大井川

2.3 物理・化学・生物環境の形成要因及び相互関係分析

2.3.1 物理環境の検討

作成した2.1のGISデータベースから、河川汽水域における河口干潟の分布や形状を規定する物理環境について検討した。その結果、潮汐や波浪の影響の大きい河川汽水域においても、その河道地形の骨格は通常の河道と同じ物理条件で説明できるという結果を得ることができた。つまり、河道形状は通常の河川と同様に砂州などの中規模河床形態で概ね説明が付き、平均年最大流量時の川幅水深比等で領域区分が可能であることがわかった⁴⁾。

2.3.2 化学環境（塩分）の検討

ここでは、河川汽水域に最も強い影響を与える塩分の動態に関する研究結果について説明する。

河川汽水域での海水混合は空間的に不均一かつ時間的変動が大きいものであり、海水と淡水の混合状態の解析には、より詳細な視点が必要である。そこで、海から潮の満ち引きにより供給された塩分や集積する赤潮藻類が、河川汽水域の時空間的に複雑な流れの影響を受けて、どのように混合滞留するかについて、滞留時間も解析可能となるように新たに開発した数値解析モデルを用いた検討を行った。さらに、河川改修や自然再生を念頭においた地形条件の改変について定量的な評価を実施した。

滞留時間は、通常のダム湖等であれば、湖の容積を時間当たりの流入量で割った時間のことを意味する。しかし、汽水域においては、塩分の滞留は複雑な挙動を示すため同様な指標を使うことはできない。汽水域における滞留時間の評価を実施するにあたっては、上記の狭義の滞留時間とは別に、例えば貧酸素水塊の形成について評価する際には、海側から汽水域に流入した水塊の流入してからの「経過時間」が重要であるし、赤潮藻類の動きについて評価する際には、汽水域のある領域に存在する藻類の当該領域における「残留時間」が必要な指標となる。そこで、本研究では河川汽水域において任意の水域における塩分と藻類などの懸濁物の「経過時間」と「残留時間」について時間的に分画して計算できる準3次元モデルを開発した^{6),7)}。

このモデルにより、河川汽水域における物質の化学変化を検討する基礎的な道具立てができるとともに、人為改変等にもなう河川汽水域の海水滞留への影響を的確に評価できるようになり、河川汽水域で問題となる貧酸素水塊や赤潮発生等の分析等に活用が期待される。塩分の経過時間に関する具体例については、後ほど2.4 インパクトレスポンスにおいて記載する。

2.3.3 植生分布を例にした相互関係分析

河川汽水域における生物環境を規定する相互関係分析の例として、植生分布の検討例を説明する。本研究では、データの豊富な名取川、吉野川、筑後川等を対象に、植生と地盤高との関係性を潮汐を勘案して分析を行い、ヨシや塩沼植物の分布特

性を明らかにした^{8),10)}。図-3は筑後川の「相対潮汐地盤高」と種毎の植生分布の例を示す。ここで、相対潮汐地盤高とは、(地盤高一朔望平均干潮位) / (朔望平均満潮位一朔望平均干潮位)であり、潮汐に対する相対的な地盤高を表している。この指標を用いて全国の河川のヨシ群落等について分析したところ共通性が見られたため、この指標値を主に用いて分析を行った。このように、河川汽水域に生育する植物の地盤高等を詳細に分析することにより、これら生物の最適な生息環境を明らかにすることができた。これらの関係性は今後検証しながら河川改修影響の最小化や自然再生計画に活用できるものである¹⁰⁾。

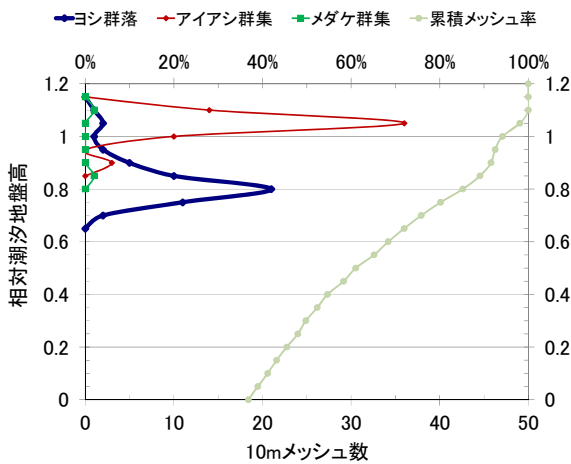


図-3 地盤高と植生群落の関係 (例：筑後川)

2.4 インパクトレスポンスの検討

ここではインパクトレスポンスの検討例として、ヤマトシジミの漁獲高の減少が問題となっている菊池川河口域の例を説明する。

菊池川は、熊本県阿蘇市(標高1,041m)を源流とする流域面積996km²、幹川流路延長71kmを有する熊本最北端の一級河川である。菊池川河口は、平均河床勾配が1/3,000程度と緩勾配であり、流入する有明海の潮汐差が大きいことから、海洋の影響を強く受けている。河口部の汽水域では、かつてヤマトシジミの漁獲が盛んであったが、1987年以降漁獲量が大幅に減少している。河口部周辺での人為的環境インパクトとして想定される最大のもは河道内における砂利採取であり、大幅な河床低下が認められる1960年代から1980年頃にかけては、統計が残る分だけでも毎年10

万m³程度の砂利採取が記録されている。現地においては、ヤマトシジミの生息環境の保全や修復が望まれており、修復による効果の検討が期待されている。

そこで、2.3.2で説明した塩分の動態を表現するモデルに、ヤマトシジミの生息環境を水質条件として組み合わせ、過去のインパクトの影響や今後の自然再生の効果について検討した。

ヤマトシジミの生息条件として、塩分環境については、成貝に関して塩分濃度22psuを超える時間割合が67%以上で生息不適とした⁹⁾。また放出された卵子が受精するための最適な塩分としては、4~6psuとし、そのような条件となる時間割合を算定することで評価した。また、ヤマトシジミの浮遊幼生の移流拡散現象についてもモデルに組み込み評価した。

ヤマトシジミの成貝の生息域の評価としては、過去、現状、修復2パターン合計4ケースについて検討した。ここで、過去とは砂利採取が行われる以前で、ヤマトシジミの漁獲高が大きかった1963年とした。修復の2パターンは、河床低下のインパクトを緩和するために、河口周辺の河道を1m上昇させた場合と河床上昇1mに加え河口に塩分の遡上を抑制するマウンド(天端高T.P.-0.5m:現地盤はT.P.-3.3m~-1.7m程度)を形成させた場合である。河床上昇1mは治水に大きな影響を与えないとして菊池川事務所が設定した値である。

図-4は、ヤマトシジミ成貝の生息条件として不適な塩分が22psu以上となる時間割合を比較したものである。生息に不適な時間割合67%以上となるのは①過去の河道条件ではほとんどないことが分かる。②現状河道条件では、河口から1.5km周辺まで不適となる。また、③河床1mかさ上げ条件により、生息可能範囲が0.7km程度下流に拡大し、④河床1mかさ上げに加えて河口にマウンドを設置した条件では生息可能範囲が1km程度下流に拡大するという評価結果になった。これらのことより、河床を1m程度上昇させる修復により、生息地としての機能の修復が図られる可能性が十分あることなどが示された⁹⁾。

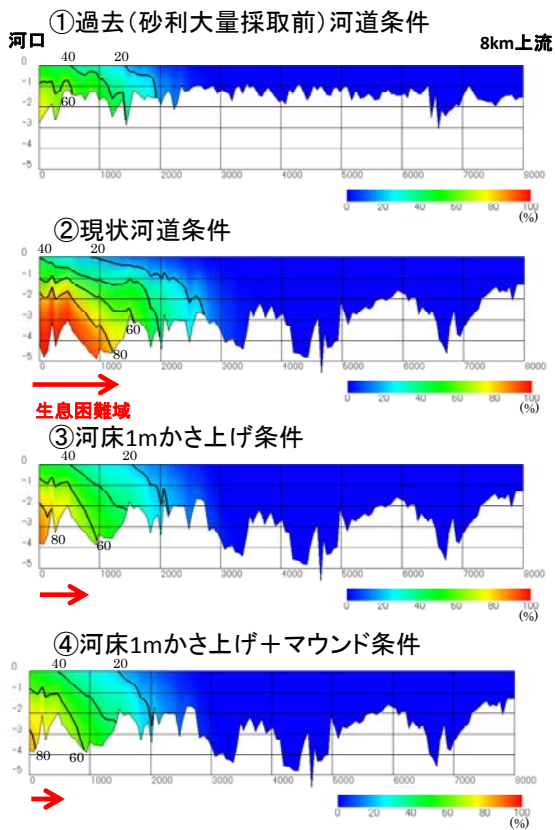


図-4 ヤマトシジミ生息条件として不適な塩分が22psu以上となる時間割合の比較

上段から①過去（1963年）河道、②現状河道、③河口周辺1m上昇河道、④河口周辺1m上昇+人工マウンド構築

3. おわりに

三か年にわたる本研究成果により、河川汽水域の保全・再生のための基本的な道具立てを準備することができた。しかしながら、河川汽水域は研究としては、新しいフィールドであり、その知見の集積はまだ十分といえないものである。本研究成果をベースに、今後研究と実践での検証を得ることにより、河川汽水域の保全再生のための技術開発が進化していくものと期待される。

参考文献

- 1) 岸田弘之、天野邦彦、大沼克弘、遠藤希実：河川汽水域の環境管理技術確立のための全国一級水系の汽水域環境類型化、水工学論文集、第55巻、pp.1273～1278、2011.
- 2) 大沼克弘、藤田光一、望月貴文、天野邦彦、佐藤泰夫、阿部徹：太田川放水路における河床変動特性と干潟の安定機構に関する考察、水工学論文集、第54巻、pp.781～786、2010.
- 3) 大沼克弘、藤田光一、天野邦彦：河口干潟の物理環境の多様性、土木技術資料、第52巻、第10号、pp.18～21、2010.
- 4) 大沼克弘、遠藤希実、天野邦彦：河川汽水域における河道形状と干潟分布に関する分析、水工学論文集、第56巻、pp.1207～1212、2012.
- 5) 大沼克弘、藤田光一、望月貴文、天野邦彦：太田川放水路を事例とした河口干潟の設計・管理方法の枠組みに関する研究、河川技術論文集、第17巻、pp.185～190、2011.
- 6) 天野邦彦、遠藤希実、大沼克弘：河口汽水域における塩水滞留時間の算定手法開発、河川技術論文集、第16巻、pp.283～288、2010.
- 7) 天野邦彦、大沼克弘、遠藤希実：河川汽水域への海水浸入後経過時間および海水残留時間の数値解析による評価、土木学会論文集G（環境）、第67巻、第7号、Ⅲ_367～374、2011.
- 8) 大沼克弘、遠藤希実、天野邦彦：河川汽水域沿岸の植生分布と潮位の関係解析、水工学論文集、第55巻、pp.1345～1350、2011.
- 9) 天野邦彦、遠藤希実、大沼克弘：ヤマトシジミの生息域として見た菊池川河口域の環境変遷と修復の可能性評価、水工学論文集、第56巻、pp.1561～1566、2012.
- 10) 大沼克弘、遠藤希実、天野邦彦：河川汽水域における河道形状と植生分布の関係解析、河川技術論文集、第18巻、pp.17～22、2012.
- 11) 遠藤希実、天野邦彦、大沼克弘：東北地方太平洋沖地震に伴う地盤沈下が汽水域植生に与える影響の分析、河川技術論文集、第18巻、pp.53～58、2012.

中村圭吾*



国土交通省国土技術政策総合研究所環境研究部河川環境研究室主任研究官、博(工)
Dr. Keigo NAKAMURA

岩見洋一**



国土交通省国土技術政策総合研究所環境研究部河川環境研究室長
Yoichi IWAMI

山本 聡***



国土交通省国土技術政策総合研究所環境研究部長
Akira YAMAMOTO